



正校
七部集

坤

14
3157
35(2上)





14
3157
35
(24)

阿羅野

尾陽遠在檀木堂主人荷兮子集を編
く名をあらはれといふ何故乎此名有年
を去くを予たるのふゆめいゆふいゆ
此郷小橋桑せしとらしくの書後をある
まゝくその日とのふそむのや舟橋ま
まは日まゝとせしやうをけあやむ
若やふひのやれく義柳橋の綿と
らそんでふそむのおれつとまゝくある風情
につまむいそむの實をともあふふの色
あれちあやのや申ふのいそむとらふふの
まゝはやののちまゝとらふとらふとらふ
のちあふつとらふとらふのたてふとらふ
てそあのみまゝとらふとらふとらふの
まゝとらふとらふとらふとらふとらふ
へ



元禄二年丙午

芭蕉枕青

○阿羅野



曠野集

花三十句

よりのあけ

赤いハハくともつり花の芳野山 貞室
 おまき色いともなる花のあけいぶ 踏通
 為るまをけこうくまの林のぬ 信徳
 もれの山とともらまうくまよまむ 晨風
 雲淋し花のうしろの鬼尾 友五
 山やふ喰ののちひる花えか 尚白
 何半そまるとる人の長 刀 去来
 みよのまきまきししあのまうまむ 野水
 ちぬのあうり戸にうまうまふ 亀洞
 ちくのりれ客といもまうん花の宿 越人
 花の山をわくくある松のわく 一井
 えあけしうふくふあうぬ花の隙 津島 俊似
 見すのいろはあまきう花の時 崩弾
 ちるとれい湯ぬまをくよく 舟泉
 冷けふ静をよくや花の陰 胡及

ちのあふ誰う傘をいまうく 長虹
 紫あは花咲あけり宵乃 雨 津島 ト枝
 ちるとれふなうくく連なり花の枝 坂阜 鴻歩
 連く川や花のいとうり 菊の時 荷分
 疵瘻の跡まきこもる花見ぶ 傘下
 あらけぬや風車賣花のとき 薄芝
 花あまきうくくくあるわうぬ とつ
 山あひの花を夕日ふえぬしんり 心苗
 おゆりろや理窟いあしふ花のま 越人
 ちうまひや初花より物のまを 野水
 獨まうく友選ひたり花の山 冬松
 花もこころけら昔なる尾ふふ 冬文
 着あして花のえよ袍とま 荷分
 酒のま唐くる人の瘡よ 芭蕉
 月花かなくして酒のむひたりか 芭蕉
 檀のあけしれふうまうまぬこころか 同

杜宇二十句

○阿羅野

ほとけとて胸やけのふらほくはなす
 もるのまゝ月えつらんほくよす 李吟
 月ふらほくふらほくはなす 煮堂
 いそひきつらふさつり 郭公 釣聖
 蠟燭のひかりやうや 蜀魂 越人
 ねん子のほくはまきや 時香 津島 松下
 跡平先氣のつく 聖きののぶら 重五
 ほくはなすはなすはなす 柳凡
 ある人のわらわて 夜白目く 有乃 枕を
 ねんきつらふさつり 鳥のぬ 龍彈
 鳴らふさつり 夜やわくはなす 落楮
 跡を真きこ 藤えうの 郭公 一髪
 こそほくはなすはなす 郭公 同
 浮山
 わくはなす十日わらわて ねんきつら 風泉
 跡はなす藤のぬ先のはなすはなす 吸阜 杏雨
 あつれはなすはなすはなす 傘下
 くらつらふさつり 郭公 同

馬と馬よとてあひたり 鈍可
 くらつらふさつり 郭公 李極
 くらつらふさつり 郭公 市山
 月三十句
 かさくはなすはなす 梅舌 土藏
 くらつらふさつり 郭公 端水
 月ひかりはなすはなす 一雪
 ぬの舟とてはなすはなす 越人
 けうとてはなすはなす 昌碧
 ねんきのぬの舟とてはなすはなす 津島 市柳
 くらつらふさつり 郭公 一髪
 とてはなすはなすはなす 長虹
 跡まて 祝抱く 月見の那 任他
 一つをやわらわてはなすはなす 龜洞
 名月とてはなすはなす 越人
 名月やわらわてはなすはなす 文鱗

名月やういづこもてはれぬ
名月や敷の夢と犬のこゑ
名月のとまえて人の月を
昌碧
傘下
二水
野水

名月の心いそごとく

むつろと月とるる日にたか
い何の月とあつとをたれて
同 荷兮

名月や海とふゆを以中も
去采

名月やも戸とわたりは
朔日 朔兮

めつらつとありそなた
釣雪

宵ふと一橋いさゆや月の
一髪

新とてたぐらぬ極えの月
杉風

三日月の事われ一
荷兮

二日
同

るる人わく
同

三日

あつたのえとてふも
芭蕉

四日
十枝

夕月夜あんん
伊豫 一泉

五日
一泉

何のこゑも
鶴声

六日
鶴声

浪河え習ふはや
一髪

七日
一髪

能くふとれ
一髪

雪二十句
其角

大は
芭蕉

雪のりや
塵交

いとゆむ
加生

竹のこゑ
小春

かたね
越人

車道
是幸

まつと
是幸

は川
是幸

ちのけのふくめりさのいつか 松 芳
 くらゐお信えんうりさの隈 二 水
 雲霞くもる嵐ふまゆる岸の那 息 仙
 夜のをおきめやう山枝あらん 除 風
 香のりや川の舟もくろくはもくろく 警 汀
 初をやわいあさるもはあきあき 傘 下
 雪の江の大舟うりいし舟の舟 芳 川
 香の物めく結もつるあうさう 冬 文
 香の香ねさやうや響の香 桂 夕
 ちうくやほ香かろ酒強版 荷 夕
 ちい香やまの香あうく漢もつて 路 通
 はうらけし香の足ふあり所 野 水
 舟の字をいつのふれくはの香 芳 川
 歳旦
 二りたぬりいせふ花の美 芭 蕉
 ふれへのあうらもくう花の美 釋 古 梵
 けりや九千年のけくく繩 凡 鈴 軒
 けりけり伊勢の富買人も誰 其 角

くらゐの石連歌ふあうけり香 文 藻
 月香のふめさあう門の松 去 来
 かさるふあうて年ふる物々非 一 晶
 元節やゆめをさくとまあうく 路 通
 えりいあままうくうけくく 加 賀 一 笑
 萬國の梅の系うむふあうく 大 垣 如 行
 ちうくさあうさうく年の文 落 椿
 若めとうちうてさうさあう 龜 洞
 伊勢浦や岸の舟あうく 同
 ちうくさあうさうくさあうの梅 大 山 昌 碧
 まののまちいさうさうさあう 元 廣
 小相子あやひうさうさあうのり 舟 泉
 ちう男千秋あをさうさあう 同
 ちはあうらうさうさあうの 重 五
 ちうさうさあうさあうの年とさう 釣 雪
 月香のゆめ花色のゆめりが 同
 連くあうさあうさあうの 一 井
 うらむとさあうさあうの 胡 及

えぬわえじりや新玉の年の海
今朝と籠く繩や一わしく柳小
はほ暇やふらの面、いつかかん
遠きや舟の通のうんふく川
佛より移そくくくくくくく
師のまやろーの息といつたらん
くくくくくくくくくくくく
二月の美のころくくくくく
くくくくくくくくくくく
あけくくくくくくくくく
大勝ち去年のまきまき自
きのおまきまきまきまき
傘くくくくくくくくく
竹まきくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
初夏や溪名の橋は今ゆきま

長 虹
荒 渾
同
湍 水
と 乞
朴 竹
冬 文
傘 下
冬 松
柳 風
防 川
昌 勝
夕 道
梅 台
野 水
同
越 人
同

志川や志つは踏くくくく
美威のやとを隣くくく
己のくくくくくく
我くくくくくく
あふくくくくく

荷 兮
同
同
同
般 齋
貞 室

初春

志草つむ跡くくく
移ゆくくくくく
七くくくくく
かかくくく
側濡くくく
吾くくく
石くくく
うくくく
萩くくく
梅くくく
花くくく

越 人
野 水
俊 似
春
藤 羅
煮 秋
玄 樂
臨 步
越 人
落 拈
一 髮
冬 松

除風 一雪 鹽車 宗鑑 落梧 越人 去來 松下 柳風 梅餌 炊玉 百歲 忠知 野水

暮春

何のまじつあふ土まの萱うた
 ねやうとこまはまらぬまをれま
 とうろくのまをる跡はまみま

舟泉 鴉歩 澗遊 社國 或之 芭蕉 野水 枝 登雪 蓬雨 去來 俊似 長之 長虹 荒彈 且藁 蕉豆 越人

阿羅野

鳥をとり日のまを 柳のまを 柳のまを

鳥をとり日のまを 柳のまを 柳のまを

涼川の巻

庵の松とてくくあつぬかしく 嵐雪
はかしのきにあちを辰か河にも 野水

仲夏

宵のるの世ふくくくくくくくくくく 母并 元 浦
川草のるのふくくくくくくくくくく 一 髪
宮のくくくくくくくくくくくくくく 不 交
風笛 くくくくくくくくくくくくくく 風 笛
青江 くくくくくくくくくくくくくく 青 江
合 吟 くくくくくくくくくくくくくく 合 吟
ト 枝 くくくくくくくくくくくくくく ト 枝
鴻 歩 くくくくくくくくくくくくくく 鴻 歩
秋 芳 くくくくくくくくくくくくくく 秋 芳
小 春 くくくくくくくくくくくくくく 小 春
杏 兩 くくくくくくくくくくくくくく 杏 兩
二 水 くくくくくくくくくくくくくく 二 水
一 笑 くくくくくくくくくくくくくく 一 笑

藤の花をうけける藤の發うけ 胡 及
汐引く藤の花をわむ果とて 児 竹
是伸くく娘命をよれらも云藤花 此 搦
竹のふふり能さけくくくくくくく 長 紅
争の時より志るくくくくくくく 去 来
はさむくくくくくくくくくくく 野 水
お丹る小折きたまる 天津 一 籠
くははの小枝ふくくくくくくく 尚 白
お目るの傘ふくくくくくくく 毒 洞
波 岸 あり

かりくくくくくくくくくくく 貞 室
おくくくくくくくくくくく 芭 蕉

おくくくくくくくくくくく 芭 蕉
おくくくくくくくくくくく 芭 蕉

おくくくくくくくくくくく 芭 蕉
おくくくくくくくくくくく 芭 蕉

おくくくくくくくくくくく 芭 蕉
おくくくくくくくくくくく 芭 蕉

阿羅野

おくくくくくくくくくくく 芭 蕉
おくくくくくくくくくくく 芭 蕉

かこひらひの霞をくちりては信あり
 尚白
 一髪
 李晨
 枝
 素堂
 人

初秋

あうくぬや麻刈あとの秋の風
 越人
 圓解

松嶋雲居の寺あり

一まふまききりしゆきまきりこ
 仙化
 方生
 杏雨
 芭蕉
 文鱗
 荷兮
 同

あこふの白きハ香ハくえぬせ

晴れるぬやわやふうつーくそ
 鴻歩
 胡及
 胤彈
 去未
 昌長
 警灯
 一髮
 素秋
 芭蕉
 其角
 舟泉
 芭蕉
 任口
 荷兮
 堀及
 素堂

宗徳法師のよきよよ

あこふの白きハ香ハくえぬせ

とくくんのうらふまゝとてなうた 俊似

仲秋

おもふ馬のとまゝなり秋の香 芭蕉
 つらくと懐とそる秋の香 小春
 谷川や茶袋そくく秋の香 益音
 石切のまじりたり秋の香 傘下
 奔のねや梅たりりあまれ ト枝
 糸のまよふ人の息 一髪
 田へ畑をひらく 一泉
 心ゆく 重五
 酒の煙 其角
 東順 林斧
 越水 宗和
 北枝 素堂

越人 防川 舟泉 胡及 曉龍 其角
 一草の芦の穂渡り あま
 木の葉ふ吹あてり ま
 風はまふ あひ
 其角

暮秋

芭蕉 一笑
 巴丈 昌碧 越人 曉龍
 其角

煙とあけく霞く月を白く
あき風の木根あらく月夜のか
俊似 野水

仲冬

おろたぐり降る雪の
志し居てついでたもりの霞うね
同 津島
勝吉
林翁
杏雨
宗之
社國
勝吉
俊似
除風
夜舟

兼題雪舟

雪舟のり雪舟舟あつと降る舟
ぬつくりし雪舟舟あつと降る舟
ねとこめて雪舟舟あつと降る舟
る雪舟舟あつと降る舟
一 長虹 井

雪舟のりや舟舟あつと降る舟
ついでたもりの霞うね
志知
船洞
朝解と見るとあつと降る舟
井と極る舟と見るとあつと降る舟

とくこいあを裸うなう

汗をうてあつと降る舟
海龍腸の毒あつと降る舟
炭窟の穴あつと降る舟
膝系をついてあつと降る舟
火をうてあつと降る舟
川のこけし底起してあつと降る舟
あつと降る舟と見るとあつと降る舟

歳暮

餅つきや肉あつと降る舟
舟あつと降る舟のあり年の雪
もちあつと降る舟と見るとあつと降る舟

阿羅野

冬松 利重 龜洞 塩車 一笑 龜洞 芭蕉
李下 尚白 野水

まよふてく構つてゐる葉細くは 亀洞
蝶もらひ梅ふさげける 飛の峰 一 髪

本居の海をてゐる人のあけり
とて持のまゝひらけりける年の暮

まてりしちかきかきうらやせん

とくはれれ持の實一いりりくと 荷分

門松とらうとく 鈴一あひ 内習

田代へ前追ふあけのきさし 龜洞

雜

年中行夏内十二句

供磨蕨白散 荷分

いとけちやととあめおる人泣き

春日祭

とくふふる店のあけはれり

石清水臨時祭

あききととつりふりさけり

灌佛

まよふのりやつりふはれり佛道

端午

ねも癒く葵付くる髪落し

施米

うちゆくわくととふそ虫息き

乞巧奠

まよふり七夕まよそまよそよき

駒迎

爪撃もと腕のそくやあひり

撰出

葉のまよふ足のとれりるたうそ

十月更衣

おききのあつとよとこの色りる

五節

葉もふあひ指をたやうそ

追儺

おまねてやあつとよと鬼の面

詩題十六句

今日不知誰計會

野水

春風春水一時來

少雨一添ぬまきれるまの風

白片落梅浮澗水

あまのこころふけくさ梅白し

春來無伴閑遊少

花堂ふるまのころもあけ隣ふ

花下忘歸因美景

藤入なまのけきせよ花の下

留春春不留春歸人寂寞

ゆきやうらうらえうわの路やう

巖風吹袂衣不寒復不熱

銜脱いねの路やうゆりうゆ

池晚蓮芳謝

蓮のあまのけきせよまのけ

暑月貪家何處有客

来唯贈北窓風

唯のこころ切あきまのけの窓

大底四時心愁苦就中腸断是秋天

まのけをいれはたり秋のま

夜來風雨後秋氣飒然新

秋のまをいれ瓜よふんまのけ

遅々鐘鼓初長夜

取々星河欲曙天

残影燈閑墻斜光月穿牖

獨寐や寝るるあふまのけの月

万物秋霜能壞色

白菊やまのけをいれと秋のま

十月江南天氣好

可憐冬景似春美

寂寞深村夜殘鴈雪中聞

ゆきくさかきまのけのまのけ

白頭夜礼佛名經

佛名の礼り獨懐く白髮小
禪心の授けのまのけのまのけ

午

ふあひよさ平よとを踏まると

未

蟬のさよふ武家の夕合ふらふら

申

ひ月るや鶴とまうるとひ作

山秋

ふあひよく生とまうると是能あ

麻葉の上ひととらふあをれさよ 樹水

野鳥

野鳥のりれとまうると日あ〜と 児竹

里虫

枝まう〜とまう〜にり蜀漆の形 舎帖

海魚

おと〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と 盆の月 全

川魚

秋の昏移川〜の火ありと 全

牛馬四足是謂天落馬首

穿牛鼻是謂人

一方いれと〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と 越人

穢舟於壑藏山於澤謂之固矣

而夜半有盲刀者負之而走

からな〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

絶聖棄知大盜乃止

七よ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

鈍者天

あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と 桂夕

鈍者壽

鈍者のさ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と 市山

藤房

ほ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と 一井

師直

ら〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と 長虹

一休

り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と 端水

法然

つるのつらみひのれきうううう 荒 弾

山 岩

あつひのあつひ 滅るの黒の角 湍 水

海 岩

きくうー海やとよのうううう 全

名 所

ひまのまを興とてんる 然田少 杜 團

あつ美の昔や式形う大江山 荷 分

かゝあれ松々あうう 暇 少く 芭 蕉

葉一 把うううううう 何はあ 湍 水

あつあつていんあやあめ花 登 荷 分

琵琶橋眺望

あつあつ 鬼獄うううう 生 少 會 帖

園あててあつあつ 香うううう 宗 祇 法 師

美濃園園うううあつあつ

あつあつうううううううう

あつあつあつあつあつあつ 更 夜 杜 團

あつあつあつあつあつあつ 重 五

あつあつあつあつあつあつ 芭 蕉

あつあつあつあつあつあつ 去 来

あつあつあつあつあつあつ 一 髪

角田川うう

あつあつあつあつあつあつ 貞 室

あつあつあつあつあつあつ 破 笠

あつあつあつあつあつあつ 芭 蕉

あつあつあつあつあつあつ 越 人

九月十三夜

あつあつあつあつあつあつ 煮 堂

あつあつあつあつあつあつ 胡 及

あつあつあつあつあつあつ 洲 支

あつあつあつあつあつあつ 舟 泉

あつあつあつあつあつあつ 尚 白

あつあつあつあつあつあつ 随 友

あつあつあつあつあつあつ 洗 悪

あつあつあつあつあつあつ 俊 似

あつあつあつあつあつあつ 一 笑

あつあつあつあつあつあつ 津島

阿羅野

雲のそとをらなつたふくろくろく
うらやふゆ唯大雪のうらやふ
早急のそををよよややふふ
あふのふやあふのふあふのふ
如行

旅
きききききききききききき
大和國平尾村あり

花のそをらなつたふくろく
あふのふやあふのふあふのふ
日の入やあふのふあふのふ
のふのふあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

湍水 野水 芭蕉 如行 芭蕉 全 楓 一 髮 荷 兮 芭 蕉 除 風 冬 松 昌 碧 松 芳 傘 下

芭蕉子と送る

梅のそをらなつたふくろく
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ
あふのふやあふのふあふのふ

あふのふやあふのふあふのふ

釣雪 一井 野水 舟泉 鼠蹊 荷台 野水 芭蕉 路通 荷兮 ち 玄 察 一井

鎌倉建長寺よまうてく

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

らん人のわかこりもよめもく

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

あまのついでにけしきよねたふらぬ越人

阿羅野

色平ふむ御多てころか那 冬文
さけり〜 越の越のいさよふらり 心棘

六宮粉黛無顔色

賣雲の粉雲 霞をや甘の粒 長虹

一をくり人伝のあるとと〜 尚白

つまれ〜とあ〜やられ〜 荷兮

あつぬ〜とあ〜やられ〜 小春

あつぬ〜とあ〜やられ〜 越人

あつぬ〜とあ〜やられ〜 俊似

あつぬ〜とあ〜やられ〜 舟泉

あつぬ〜とあ〜やられ〜 嵐蓑

あつぬ〜とあ〜やられ〜 山畑

あつぬ〜とあ〜やられ〜 松芳

あつぬ〜とあ〜やられ〜 冬松

あつぬ〜とあ〜やられ〜 昌碧

あつぬ〜とあ〜やられ〜 無常

あつぬ〜とあ〜やられ〜 末期

あつぬ〜とあ〜やられ〜 守武

あつぬ〜とあ〜やられ〜 守武

あつぬ〜とあ〜やられ〜 守武

あつぬ〜とあ〜やられ〜 守武

あつぬ〜とあ〜やられ〜 守武

あつぬ〜とあ〜やられ〜 守武

無常迅速

嗚つたひりひり鳴るけーの鳥が 傘下

末期う

南をやきく青の原の原^坂 元順

松坂の浮城とく人のあまう

くまふんやう

梯のまうりれえぬまのりやうり 荷今

いむとの遊草よ

あううふのれくく溜るき^京 去來

いん人あししやうけつる射すき

いんまの山成とくあまのちきりけ 荷今

世をまをくまのあはうりるん

あそ月の洞のくまふんやう^一 野水

辞世

あそと世灯籠つりよ主コ翁

あふぶくけつる頂

あそ顔のあそくもくもく^一 落枯

一原野やう

抑々や小町う昔のよのよよ 釣雪

多の遊草

とこれー志での里人それらめむ 自悦

李下う妻のくまうりしとく

はらまをやうくくひえけかぬりし 去來

ユ泳身まうりし後

その人の射さく^一秋のとま 其角

おあおくれく子のをれ

とこれあやうり合^一秋の言 尚白

いん人の遊草よ

抑々ときやわくく^一の意もま 芭蕉

後ふくみまうりく^一の人を

あそまのくく^一あうらふ溜^一やう 荒彈

もろき路のうく^一念佛のまの^{加賀} 小春

釋教

伊勢やう

非^一ほや^一ふ^一の^一ま^一を^一温^一染^一像 芭蕉

負^一く^一あ^一ま^一は^一り^一く^一は^一ん^一像 荒彈

西行上人五百歳忌小

くわきりとおのりある機うね 荷兮
おのりまきらふ

連翹やまを日とまをれりて 胡及

うて青ふ地の家うくる二玉か 松芳

赤唇をく傍か有るりるの花 杜國

はらうひと痛く熱く糸のち 冬松

花小酒傍くゆらん塔さうね 其角

貞享つちの乙辰の歳生一日

東照宮の別當僧正の法房小慈惠

大師近座執事法華八講の傍たきり

るわれは聴聞ふまうりく序品のをど

散花のるいじりてぬりてぬ 越人

女房の柱す布とまをくは塵くれかく

啼きあめり龍女成佛のふしむらさき

ほろりとあまのこゝろをぬいのか 全

親多の尾とのけりてけりふりて 俊似

古きやつるまぬうひの垂草 一井

はとの糸をよひくむやゆひは 千閑

鳴りあうふをんわさの江牡丹 一井

夏草赤花くくの江湖新屋 葉葉

灌佛の月よせ杭をく麻子小 芭菘

流佛のまははらまをくうのこ 尚白

海のあふき花をたつりの山山小 一雪

林小まをて庵一日の清もみ小 一笑

やのつりなをれて通るうらふ小 荷兮

即身即佛

夏陽のまをきいほんのか 愚益

ほろりとや傍の清もみ 鼠彈

おとろくやいのかあうく 探丸

石籠小施賊鬼の物のころつきのわ 文里
魂たまはつり舟ふね酒さけとも向むかきり 龜洞
たまはつりるふるあるるれ兼あり 卜枝
松まつ竹たけのこらんとん松まつのた 釣雪

平等施一切

松まつ竹たけのこらんとん松まつのた 釣雪
松まつ竹たけのこらんとん松まつのた 釣雪

ある寺の奥のふ
ある寺の奥のふ

ある寺の奥のふ 荷兮

ある寺の奥のふ 其角

ある寺の奥のふ 一井

ある寺の奥のふ 卜枝

ある寺の奥のふ 龍彈

ある寺の奥のふ 越人

ある寺の奥のふ 荷兮

ある寺の奥のふ 俊似

ある寺の奥のふ 一井

ある寺の奥のふ 文潤

ある寺の奥のふ 其角

ある寺の奥のふ 胡及

ある寺の奥のふ 如子得母

○阿羅野

ある寺の奥のふ 如子得母

ある寺の奥のふ 如商人得主

ある寺の奥のふ 如商人得主

竹ささぎのあざむきをなつてけけけ

如渡得無

ものさう清の程なきらうちうり

如病得醫

うつくしき清の程なきらうちうり

如暗得燈

秋のあやむらさきを照らす

神祇

あやむらさきを照らす

二月五日(月)

あやむらさきを照らす

あやむらさきを照らす

あやむらさきを照らす

あやむらさきを照らす

あやむらさきを照らす

あやむらさきを照らす

あやむらさきを照らす

あやむらさきを照らす

釣雪

荷分

全

龜洞

昌碧

釣雪

越人

舟泉

雨桐

門あそび梅の湯籠をのみる

捨てる人の子の後のさくら

茶ふきで萬葉のうらうら

宮の後川にさくらをさくら

水も流のあはれ草の中の

ほろもきまておまのちと

あまの灯とさくら火事

破扇をさくら流をさくら

川系まで癒まされお後

うらうらや里の子をさくら

は月のえは頂いさくら

さくらやゆきさくら

若言奉納

きこえぬさくら

海の方と癒まされお後

流系川を海の子をさくら

あやむらさきを照らす

橋杭や流系をさくら

重五

玄察

鈍可

李桃

好葉

玄察

龜洞

未字

荷分

尚白

松芳

落梧

利重

野水

昌碧

村俊

ト枝

祝

肩付といくもふわりぬきまふく 冬文
 荷さう四十のまふく
 重五
 越人
 傘下
 龍洞
 同
 芭蕉

曠野集負外

維りまをゆもまらむを祝く市甲ふ
 りく朝のまきとを海東四明
 佐藤ふ有くたのまらむとを
 佐川田森六のまらむとを
 まらむとを
 尾陽の舞まらむの他とて芭蕉翁
 のまらむとを
 田野一居とを
 びうあまを有る人の宇ふ虎の物語
 色とを
 らまらむとを
 にる三巻のまらむとを
 字老社のまらむとを
 まらむとを

素堂

これ文人のこころのつらさのつらさのつらさ

まことさかき波のうけゆる 野水
 橋の踏と志とふまのまゝく 荷台
 わのふりかゝるおこりあつと 越人
 門のふりかゝるのやまゝく 水
 風の目利と袖秋のやまゝく 水
 武士の奮つ山山をく 水
 志をりふつて波の鳴る音 水
 空をり経よりおきまのく 水
 時やとられくつるひるる 水
 まつり松のまゝるるの橋 水
 千句いねむ山山のてら 水
 塔さくつ一き橋を嘆けり 水
 あてこしつるく月夜うね 水
 赤の身は流のやまゝくおらひ 水
 杖とちふなく登人の妻 水
 鳴るやら西と東と滝の声 水

さびしやうりる利根の川舟 水
 その見たりとつらさのてかき 水
 承るりりつと羽織うらまゝく 水
 ふらりとときあつ市の屋いね 水
 梳つとや人のえるる 水
 柏本の御氣のたのつらさ 水
 さくやくこのまゝあつと 水
 月の影より今より 水
 秋ふちるより里の酒と亭 水
 赤くこれ歩むあつと 水
 うれしとあつとあつと 水
 かゝるまゝの謙下候のまゝ 水
 火箸のまゝくまゝのあつと 水
 うくまゝのまゝくまゝのあつと 水
 ませまゝのまゝくまゝのあつと 水
 花さつり都といまゝく 水
 持るまゝのまゝくまゝのあつと 水
 星をえいふ月とまゝく 水

人かなふに招きよして花ふり
 ついでにふある 精進
 花よき嫩うき 花よき夫の心
 柳のうらみはうまきりの卵
 夕の影を深おとすてうらみ
 夕よきとやうらみ月影
 秋葉のよきとやうらみ
 うらみとくくる 掃角力とて
 きつり又の拾うてとて
 まましく 砂の中のあれとて
 火氣の皮の衣とくくみきて
 後えせしとくうらみ
 まましく 砂を向いてとて
 扇の半く 照らしてとて
 花よきとやうらみ
 よまて 双紙の繪とて
 かりあるもくうらみ

釣雪
 野水
 舟泉
 松芳
 冬文
 荷兮
 舟泉
 松芳
 冬文
 舟泉
 松芳
 舟泉
 荷兮

舟のやうらや花よき井の君
 灯よきとやうらみ
 珠敷くるとうらみ 招息のこ
 降辰し入るうらみの
 十日のきくのをとて
 山中の秋うらみとて
 長持買うとて
 ざんげとあられとて
 馬のよきハるのいかり
 さのよきとやうらみ
 遠よまてとて
 ついでとて
 あつとて
 けのよきとて
 味留まるとて
 花よきの門とて
 次よきとて
 美の鈴赤貝とて

冬文
 舟泉
 松芳
 冬文
 荷兮
 舟泉
 松芳
 冬文
 舟泉
 松芳
 舟泉
 荷兮

ふく風よきはらうらまのふらうらと
 半ハこそ守薬やまの 秋
 ひらうらうらと月影の秋の秋
 人の清うらうらと秋の秋
 あさうらうらと秋の秋
 千せうらうらと秋の秋
 ありうらうらと秋の秋
 皆同うらうらと秋の秋
 百万もとらうらと秋の秋
 田楽もとらうらと秋の秋

深川の秋

層々ゆき雪の川うらうらと秋の秋
 ほとけのあうらうらと秋の秋
 ありうらうらと秋の秋
 理ととらうらと秋の秋
 飄箏のたうらと秋の秋
 風ふらうらと秋の秋

越人

芭蕉

全人

越人

芭蕉

かりうらうらと秋の秋
 賢のたうらうらと秋の秋
 いとらうらと秋の秋
 むらうらと秋の秋
 比甲うらうらと秋の秋
 是秋うらうらと秋の秋
 まらうらと秋の秋
 風らうらと秋の秋
 ちらうらと秋の秋
 おらうらと秋の秋
 月とらうらと秋の秋
 さらうらと秋の秋
 秋とらうらと秋の秋
 えらうらと秋の秋
 家らうらと秋の秋
 わらうらと秋の秋
 人らうらと秋の秋
 初秋うらうらと秋の秋

全人

越人

芭蕉

全人

越人

芭蕉

全人

越人

芭蕉

全人

越人

芭蕉

全人

越人

芭蕉

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible.

炭俵序

此集と撰める孤を野坡利牛らゝ常ふ
芭蕉の軒くけのよひ尾の窓をひ
らと心乃泉とらみをうとく十あまり
たりのふ雪子の野原をそけはあふ
車也雲海をわとけく河をませく
るれ二三子をふゆく大橋ふり
とむら子庵をくらねふはとけ宋人
のふ龜まゝとてくる葉をわらうん
まは、お箸ふ湯のそとゆりたると世ふ
おき横ふかりわらうと金屋の松のたきよ
をまはしとむらりまらふいとるまのこ
まら年ふ入はくもらうらうのあまのめ
そのの芭蕉魂のまきうらうらあはく
とまはしとほのののののののののの
の月よりいららうけくやかたうら
て竟ふらあつたは二またふらうら
らまらふ有芭蕉のほとらまらうら

○炭俵

町元の清らりと解く花の陰
 野坡
 月く押さく壬生の会ふ佛
 芭蕉
 赤風のせしふ葉ののきと波の
 全
 もく居るまうふ朧わ川らぬ
 野坡
 江戸のち吉比呂の事とせられて
 芭蕉
 こらわたりれとうう向とこのす
 野坡
 方くふすおの内のうひの事
 芭蕉
 相のあましく月さゆるあつと
 野坡
 口さうくくもつておる面むこ
 芭蕉
 ひらふと金で暮るのこころ
 野坡
 まつ年ふ女房のおやと振舞て
 芭蕉
 又このもろ色休ぬ草人
 野坡
 法衣の湯伝とさるる花さうり
 芭蕉
 繩ふとたりくくまのゆま
 野坡
 との家もあの方ふ空とあけ
 全
 奥ふ冷あくくまの雑炊
 芭蕉
 ふも鳴一おくくあまうわう
 野坡
 未まのうのこしてぬ茶用
 芭蕉

驟とを知らせも嫁とつれもて
 野坡
 展風の傳りくくやうまふ魚
 芭蕉

三吟

若好と遊かりくくをさうり
 嵐雪
 あさみや草く雀籠とらる
 利牛
 斤道々まのゆ飯のくくまうて
 野坡
 介とらましく小冊く相撲場
 嵐雪
 細くと朝日さうりの宵の月
 利牛
 早稲も晚稲と相せふある
 野坡
 泥濘をまき流くくくまうら
 嵐雪
 けちさうとをれい屋のこひうり
 利牛
 隣くく草く嫁とまふある
 野坡
 てさうくくくくをさうりわうり
 嵐雪
 尾谷のくくは多崎を護院
 利牛
 お百のうけと二ふふをなす
 野坡
 洞あまのわがのぬあまをのこ
 嵐雪
 人のまらぬねらうむあり
 利牛

○炭俵

安今ふり回心の何とと健
 丸九十日淫をこ川らふ
 桜野ゆらららまふらう
 夏なり一葉紅きよう信ふ
 里離れ礼川のふらつて
 かしらうゆめのと娘の獲も
 氣ふらうる朝日志すの精と
 くん一果するハ春のそら
 町寧ろ心甚儀のわうら
 海江う淋く土ふふあ節
 夕月不醫老の名堂とす
 白く成る能のやよこ
 定免と今年風のふぬ
 めもやはらゆめあぬおと
 暑病のはふ土用とらうら
 寒月ううてこゆるを坂
 城ゆせぬ照治屋のむの
 門連まを町のあ

野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋

彼岸色一葉の花の咲く
 三人なうらわゆる

野坡 執筆

春之部發句

立春

春風入りすたや浮勢の初便
 赤きやまのうらをうらう
 みらるくのうら羅織ん
 春や従一丹波の聲は
 刀さき懐わつとく
 いそしきと存のかさ
 管種や春のあひの
 程いそしき門汽坊
 目下おと申の細や
 初日我差三とつ
 長松う親の春て

芭蕉 濁子 杉凡 去来 西秀 洒堂 梅水 沾圃 孤屋 利牛 野坡 露沾

○炭俵

枝をく伐らぬを枝の那 湖春
 念ふくをくつわむ枝 曲翠
 瀝くくくくくくくくく 嵐雪
 ものぬをほをぬの赤枝 支考
 ほき掃除してくく枝をみり 野坡

花

くく種の花をよまのりゆ
 くる幕打はまきわのくま
 乃あうはあくくあうふるか
 の花のくをたのみく

四のわ若の枝をぬたをぬ 芭蕉
 むらりやゆてたえのすつめ 杉風
 うくくくくくくくくくく 文章

何くくのかくくの後の

さくくくくくく

中をくくくくくくくくく 素龍
 若くくくくくくくくく 去来
 朝めくくの湯と丘橋や庭の花 孤屋

所をくくくくくくくくく 荆口
 たのまをくくくくくくく 斜嶺
 柿のぬをぬをぬをぬぬぬ 北枝
 物ゆをくくくくくくくく 湖春
 あくくくくくくくくくく 其角
 若くくくくくくくくくく 嵐雪
 少くくくくくくくくくく 智月
 老僧も袈裟をぬぬぬぬぬ 之道
 流舟も若くくくくくくく 祐甫
 山さくくくくくくくくく 普全
 昆布くくくくくくくくく 利牛
 ちりつきいぬをまうせや 孤屋
 おくくくくくくくくく 野坡
 食の付をれりつまるや 全

上巳

草屋くくくくくくくく 沾徳
 ちりつめくくくくくく 桃隣

○炭俵

此とこれやとありくゑる丸木橋 素龍
 六月のさや 後川大和川 楓隣
 さくられふ小橋とほるるる夜や 野坡
 六月のさやのさやよりなる蔭蔭 嵐麓
 この白の楓清よりちてくぬ
 六月のさや 影と花し力の本 山水

涼

川中の根あふよとくふくみく 芭蕉
 自然ふうとくふくふくふくふく 女
 涼しとくふくふくふくふく 長寄 夕
 り花とちいてくふくふくふく 探芝
 涼風ふくふくふくふくふく 智月
 さくられふとくふくふくふく 備前 元峯
 涼しとくふくふくふくふく 去未
 夕まふくふくふくふくふく 野坡
 夕まの涼しとくふくふくふく 素堂
 影しとくふく
 楊柳 定丸 札のありとくふく 杉風

野中しむくや 楓並みとくふくふく 心秀
 世の中や 年貞 島のさーの花 里東
 ふくふくふくふくふくふく 嵐雪
 本曾 藤ふくふく

やまふくふく 巴とある 田植ふく 許六
 さくられふ 夕まふくふく 花の影 智尺
 夕まふく 夕まふくふくふく 北 靨
 夕まのやとくふくふく 蓮の花 乙州
 夕まのやとくふくふく 夕まふく 文艸
 夕まのやとくふくふく 夕まふく 仙花
 夕まのやとくふくふく 夕まふく 楚舟
 夕まのやとくふくふく 夕まふく 残香
 夕まのやとくふくふく 夕まふく 為有
 夕まのやとくふくふく 夕まふく 怒風
 夕まのやとくふくふく 夕まふく 祐甫
 夕まのやとくふくふく 夕まふく 仙花
 夕まのやとくふくふく 夕まふく 嵐雪

○炭俵

さくられふ人 僕と酒とたしむくふく

秋虫

幸よれいあひらくくそきんくく
 悔いの人のもきれやわりのく
 帰歸ふくしてあくるめくこ
 こららきや着て遊る後のと
 友兼の鳴とえらる小兼の
 人のめあふら
 兼のふむけや双の躬廻形
 旅りのとき
 江流やまうひあくる兼の
 草花
 宮城野の萩や友より秋の花
 花まきとくちくちやひら雀
 戸島の萩や川を橋の端
 芦の穂や秋に揚る夏ま
 茅のちよ著つらや暮の橋
 去来
 智月
 丈艸
 為有
 孤屋
 車来
 素龍
 土芳
 桃隣
 野童
 猿
 艾草

女中の舞臺

草花や鼻のそふるあつら
其角

園菊

葉畑ゆくある芳のらり
桃隣

秋植物

柿のちるふとあそものま
利牛
 萩葉やあふらうら
枯南
 秋風やあ子の結のあ
木白
 葉あきて空あそら
孤屋

うれは世南んあそえ
 やああ未詳わつと天の
 こハツたうれとら
 とこのあるん
 あうねま
 い油うまうれけめ
 天資自苑の埋さう
 根む

炭俵

初名のマツのやぶの鼻をーら 利牛
こつともや藤の蔭のまのうへ 買山
雪の白ふも傍まうと 鶴 依々
雪の白やうまうらうらうらうら 猿 雖

雪の夜風を寺あく

杖のまよの雪をぬきり杖の傍 支考
杖の跡や杖をくくまうの雪の傍 北枝
初まや先てる雪うらうらまひる 許六
岩のまの横所さうる雪吹く 湖夕
海山のまの雪吹く 乙州
江のまや曲突ふとまうの雪の傍 素龍

歌不記

かあーこの物ふおらむ杖をく 相里上人 呂丸
雪の白も杖の跡のうらうの傍 芭蕉
禪門の雪は袋ねらむ十杖を 許六
雪の白のまの雪吹く村うらうら 智月
白雲のまの雪吹く杖の傍 之道
杖の白やあつとさ方の又六尺 文章

庚申やこも小巨魁のけりな 残香
誰とけり縁組をて里外楽 其角
はく障素やまうら波のま 全

雪のまき

煤をまきいばり杖のまき 芭蕉
煤拂障子をまきいばり代り 万平
煤つまやえ返るまきをまき 野坡
山外のまきやまきを 嵐雪
雪をまきいばりまきをまき 智月

歳暮

このまきや又うらうらー同ー 杉凡
まきまきぬ舞入りありまき 李由
あまませせて雪一ねとーのま 智月
雪うらこのけりまきまきまき 孤屋
雪のまきまきまきまきまき 猿 雖
まきのまきまきまきまきまき 野坡

芭蕉よりの又ふられのま

まきのまきまきまきまきまき

炭俵

まきのまきまきまきまきまき

爪をくちやさくや年をとり 素龍

り年よまへとわつとも状ひらり 湖春

俳諧秋之部

其角

秋の空尾とれ枝不離れり

孤屋

おくれて一羽海とくも響

全

新芳小日備枝る貝吹く

角

舟のうらうら 四非の門

全

祖文りもの大柳とあひたり

孤屋

つらひらふいぬをころちを

全

下東いざしの葉をまきりて

其角

坊とのまきり葉いとくき

孤屋

足燈のふきりて居るハツリ

其角

息吹りつと 霍丸の汁

孤屋

田の畔ふ早苗把く投くを

其角

道老のなきむ編まの糸

孤屋

り燈のりやとくはとくは

形ふかのまきりうらぬの月 其角

形暈り 鱧のまきりいひり 孤屋

唇のりりり 花なつた 其角

やその物伴桂の花をもち 孤屋

むりのふあり志のまきりて 其角

いとをねりまきり令のつうひた 全

文の端のあきりりき 孤屋

夏草のがふさきてやれり 其角

あまこといと小傍つやのり 孤屋

年のまきり樹の枝もあきり 其角

まきりときなつとも風をたま川 孤屋

君らひいこそは流すのあきり 其角

稗と枝とのに高つる 孤屋

幸崎へ雀のこむる秋の雪 其角

かより冷れ月のを 孤屋

我福して夜もあきり酒の味 其角

と墜れり小流く向く壁 孤屋

小栗 鐘むに言よせてまきり 其角

炭俵

隣へひく火とこりく来る 子珊
 又うらも佛の舎て坊と明 利牛
 括をうらうして賢とくゆし 杉風
 大坂の人ふまれくるその自 利合
 酒とこま統も祖母のまふ入 野坡
 まうけぬるあ糸の二酒のをけさ 子珊
 次の小社をてつふむせるを 利牛
 約あふかるとて居れいあふ有れ 曹良
 七ツのうめよなる花もよある 杉風
 花のるあふとくゆふ花あふ 桃隣
 男まうらふふ道そらうへに 松水
 杉風五 孤屋二 芭蕉一
 子珊五 桃隣四 利牛三
 松水三 野坡三 沾圃二
 石菊二 利合二 依々二
 曹良二

龜田甚三郎校正

芭蕉句集

俳諧玉葉集

俳諧礎

俳類題玉詠集

闇雲愚抄

一茶句集

百々人集

大和詞

嘉永四年 庚午年六月

日本橋通四丁目十番地

白樂圃 椀屋 江嶋 伊兵衛

